支え合いの輪

洞北中学校３年　　久保田　凛

御年九十二歳の曽祖父、御年八十八歳の曽祖母。まだまだ元気な二人を家族で介護している。今でこそ、介護保険の恩恵を受け二人共快適な生活をしているが、一年前までは大変だった。その実体験を書いていきたいと思う。

二人はとても頑固で最高のコンビネーションを持っている。一人が嫌がる事は二人共、満場一致の嫌。ケアマネージャーさんの説得も空しくデイサービスに行くのは気まぐれだし、介護ベッドも

「日本人やから布団が良い。」

と、頑なに拒み和室に布団という昔ながらのスタイルで生活していた。何も聞く耳を持たず、頑固に、自由に、元気に、気ままに。

転機となったのは、夏のうだるような暑さ。

「エアコンは勿体無い、扇風機で上等。」

そう言って私達がつけたエアコンを、すかさず消す。オン、オフ。オン、オフ。これを一日何十回と繰り返し、とうとう軽度の熱中症になり、二週間夫婦二人で入院する事になってしまったのだ。水分補給が不十分だったのか、無理矢理にでもエアコンを付けて見張っておけば…。後悔の念が押し寄せる。

そんな時だ。ケアマネージャーさんが提案してくれた「自宅大改造計画」。エアコンの件のお説教は主治医の先生にお任せして、私達は自宅をより安心して介護のできる場所へと変えましょう、そう笑顔で励ましてくれた。それから退院までの約二週間は何度もケアカンファを行い生活動線を考えながら介護福祉用具のカタログを見て部屋を作りあげていった。

「こんな物まで借りれるとね。」

曽祖父と曽祖母は部屋を見渡しながら目を輝かせた。転倒防止に取り付けた突っ張り式の手すり、ソファー横の補助手すり、長時間寝ても体が痛くなりにくいベッドとマット。私達を呼びたい時のワイヤレスチャイム、曽祖父の三点杖も月々格安でレンタルでき、壁の手すりや入浴の椅子、段差を無くすスロープは一割負担で購入できた。少子高齢化が進む中、本当に有り難い制度だと痛感した。曽祖父母が、祖父母が、両親が、北九州市の人々が納めた税金のおかげで安心して曽祖父母が暮らせる環境作りを行うことができたのだから。税金は、目に見えない形の無い、どこか自分とは無縁な物と感じていたけれど、私の住む町、北九州市を見渡すと普段目にする公園や道路、施設や毎日のごみ出し、美しい町並み、生活のありとあらゆる物が税金によって支えられている。子どもから、曽祖父母の様な高齢者まで、みんなが笑顔で暮らせる街作りを行う税金。人と人との支え合いで明るい未来を作る制度を体感した私は、目の前に広がるこの街をより良くする為に、今日から一歩一歩前進していこうと思う。いつの日か大人になった時にはきちんと納税をして、今度は支える存在となりたい。